Chapter 2 :  **珍しい正統派の英雄、お姫様、そして暴君** Part 2

**シーン六：影の監視者たちの包囲**

神殿は今や要塞と化していた。

バンギラスの命令により、彼の精鋭のあくタイプの番人たちが警戒していた：

* アブソル、沈黙の中に不吉な眼差しを光らせて。
* ダークライ、悪夢そのもののように壁をすり抜けて漂う。
* ヤミラミ、目に宝石のような輝きを宿し、いたずら心でにやにや笑う。
* そしてゾロアーク、ただ一人の雌、獰猛でずる賢く、全てを疑っていた。

神殿内部では、バンギラスが最後の準備を進めていた。エーフィは儀式用の白い絹に黒曜石の糸が編み込まれたドレスに縛られ、うめくように抵抗していた。彼女の涙が静かに落ちていた。

「もう神すら変えられねぇ。お前は俺のものになるんだよ…」

——

外では、ブラッキーがホウオウの前に立っていた。伝説の鳥は黄金に輝いていた。

「お願いだ、」ブラッキーは深く頭を下げた。「奴らを引きつけてくれ。すべてを受けてくれ。一度だけでいい、チャンスをくれ。」

ホウオウは瞬きをし、天を揺らす鳴き声を上げた。

空が再び裂けた。

炎が天から降り、ホウオウは神殿へと舞い降りた。炎と光で影を打ち払う。アブソルとダークライが即座に反応し、ナイトスラッシュとダークホールで反撃。ヤミラミは羽根をすり抜けながら笑い、ゾロアークは幻影の中に消えた。

——

混乱の中、ブラッキーはブリッスルにうなずいた。彼女はすでに動いていた。裏道を素早く、静かに抜けていく。心臓は早鐘のように鳴る。任務はただ一つ――エーフィを解放すること。

しかし到着した時、

エーフィはすでに祭壇に縛られていた。バンギラスが最後の呪われたヴェールを手にして立っていた。

「……！」

ブリッスルは息を呑んだ。

——

その頃、森の中ではピカチュウが足を止めていた。

戦いの音が背後から響く。

「……俺はネズミだ。だが、逃げネズミじゃねぇ。」

彼は低くうなり、火花を散らしながら神殿へと走り出した。

**シーン七：不死鳥、堕ちかける**

ホウオウは壮麗に燃えながらも、ついに揺らぎ始めていた。

アブソルの刃が確実に傷を与え、ダークライのダークパルスが聖なる羽根を裂き、ゾロアークの幻影が神すら惑わせる。ホウオウは最後のせいなるほのおで敵を退けたが、その翼は垂れ、炎もかすかだった。

「もう…再び飛ぶことはできぬ…」ホウオウが喘いだ。

ブラッキーは傷を負いながらも、その前に立ちはだかった。「ならば、俺が代わりに立つ。」

ナイトスラッシュが脇腹を切り裂く。ブラッキーはうめき、倒れかけた――

その瞬間、稲妻が夜を裂いた。

ピカチュウが怒りを帯びて飛び込み、「でんじはッ！」

アブソルが痙攣し、動きを止めた。戦局が一変する。ゾロアークは煙の中へと消え、ダークライとヤミラミを連れて撤退した。

だがピカチュウは気づかなかった。

ゾロアークが再び現れた、エーフィの姿で。

「エーフィ…？」ピカチュウは瞬きした。

スラッシュ。

血が飛び散る。ピカチュウは再び倒れ、息を切らした。

「やめろォッ！！」ブラッキーが吠え、怒りのはらいせを込めてふくしゅうを放った。ホウオウが空から光の裁きを下し、幻影が消え、ゾロアークは気絶した。

ホウオウの残り火がピカチュウに降り注ぎ、呼吸が戻る。

「俺…二回も死んでんだけど…三回目はチャージで頼むわ…」ピカチュウがかすれた声でつぶやいた。

——

その頃…

神殿の奥、静まり返った裏廊下で、ブリッスルはエーフィに手が届きそうだった。ヴェールの最後の糸に手を伸ばした、その時――

背後からささやき声。

ダークライの冷たい息。ヤミラミの手が腕を掴む。

彼女は一度叫んだ、そして闇に呑まれた。

**最終章：救われし影と、暴君の終焉**

戦いの残骸の中、ブラッキーは倒れたゾロアークとアブソルの前に立っていた。復讐ではなく、慈悲の光を帯びて。

「闇で終わる必要なんてない。」

ゾロアークがうめきながら動く。「あたし、まだ600ポケ借りてるんだけど…利息つきで。」

「払ったわよ…そのうち…」エーフィがテレパシーでため息をついた。

アブソルは目を伏せていた。「スキンが欲しかったんだ…伝説級10種が一気に来たんだよ。…心が折れた。」彼は顔を背けた。「こんなはずじゃなかったのに…」

ブラッキーは手を差し出した。「なら、今度は一緒に戦おう。」

彼らはその手を取った。

——

その時、バンギラスが再び現れ、神殿の壁をぶち破って登場した。怒りは増し、今や歪んだメガストーンのオーラを帯びていた。

「俺に逆らう気か…全員でかァッ！？」

ブラッキーが一歩前に出た。その背後には：

* ピカチュウ、尾が決意の火花を散らす
* ゾロアーク、幻影を身にまとい
* アブソル、鋭く澄んだ眼
* ホウオウ、再び神火をまとう

バンギラスは地と影の咆哮とともに突撃した。

彼らは、まさに神々の如き一撃でぶつかり合った。

——

その最中、ゾロアークとホウオウは戦場を横から包囲し、背後から出現したダークライを撃つ。ゾロアークは幻影で翻弄し、ホウオウは悪夢を神火で焼き尽くす。

一方、アブソルとピカチュウはヤミラミを追い詰める。ヤミラミは狂ったようにシャドークローを振り回すが、アブソルの冷静な斬撃がそれを断ち、ピカチュウのサンダーボルトが決定打を与えた。

その途中、アブソルがピカチュウにささやいた。「援護してくれ。」

彼はひっそりと戦場を離れた。

——

神殿の中、ブリッスルとエーフィは影の鎖に縛られていた――

スパッ。

アブソルが背後から現れ、無言で拘束を切り裂いた。

「遅いじゃない。」ブリッスルは埃を払った。

「サイドクエストだったんだ…」彼は呟いた。

——

前線に戻ったブリッスルは全力のいやしのはどうを放ち、状態異常を打ち消し、ブラッキーの力を回復させた。エーフィも加わり、無言でうなずくと、サイケこうせんがバンギラスの装甲を切り裂いた。

ふたりの連携技が炸裂。エーフィのサイコパワーとブラッキーのあくのはどうが、歪んだ力を断ち切る。バンギラスは咆哮した。

そして、最後の一撃は五体同時に放たれた：

* ピカチュウのボルテッカー
* ゾロアークのナイトバースト
* アブソルのメガホーン
* エーフィのサイコショック
* ブラッキーのラストリゾート

バンギラスは倒れた。

砕け、沈み、意識を失う。メガストーンは粉砕された。

——

神殿には静寂が戻った。風が残りの塵をさらった。

ブラッキーはホウオウに向き直った。「終わった。」

ホウオウはうなずいた。「闇を選ばず、光を選んだ。だからこそ、お前たちは英雄だ。」

ピカチュウはその場にドサリと座り込んだ。「次の章では死なないで済む？」

バンギラス、ヤミラミ、ダークライ（いずれも気絶）は置いてけぼりにされ、他の全員が笑った。